

上代日本語における  
名詞述語文の小節構造分析  
— 現代日本語の名詞述語文との比較から —

上 野 貴 史

広島大学大学院文学研究科論集 第79巻（2019年12月）別刷

*THE HIROSHIMA UNIVERSITY STUDIES*  
*GRADUATE SCHOOL OF LETTERS*

VOL. 79 · DECEMBER 2019

# 上代日本語における名詞述語文の小節構造分析

—現代日本語の名詞述語文との比較から—

上野 貴史

【キーワード】名詞述語文、分裂文、「ノダ」文、コピュラ、小節構造

## 1. はじめに

本稿は、述部が “*-da*” の構造となる名詞述語文( )<sup>1)</sup>に関して、上代日本語で名詞述語文がどのような形式・機能を持っていたかを明確にしようとするものである。名詞述語文におけるコピュラ( )は、現代語では *-da/-dearu* であるが、その出自は上代(8世紀)の *-nari*<sup>2)</sup>にまで遡ることができる。この上代における断定の助動詞 *-nari* は、中古日本語(12世紀)まで最も優勢なコピュラとして用いられていたが、中世日本語とされる15世紀頃には、この *-nari* から転じた *-niteari* がより優勢なコピュラとなる。この *-niteari* は更に *-dearu* と転じ、これが *-dearu* の使用の始まりとなる。さらにこの *-dearu* が *-dea* > *-dya* と転じ *-da* が形成される。この通時的変遷の概略は、(1)のように示すことができる<sup>3)</sup>。

(1) *-niari* *-nari* *-niteari* *-dearu* *-dea* *-dya* *-da*

このことから、上代語のコピュラは *-n(i)ari* であるというのが通説であるが、名詞述語文ではコピュラ *-n(i)ari* の他にゼロコピュラ( $\emptyset$ )も多用されている。そこで本稿では、“*-pa -\emptyset-n(i)ari*” という上代語の名詞述語文の統語構造を小節構造( )として分析し、この構造における意味機能を考察していく。このために、まず現代語における名詞述語文の意味機能を整理し、『萬葉集』をデータとした上代語の名詞述語文における意味機能と比較していく。

さらに、上代語においては、“*-pa -\emptyset-n(i)ari*” と類似する構造として、係助詞 *-zo* を用いた “*-zo* ” という「係り結び」構造がある。本稿では、この「係り結び」構造が名詞述語文であるかどうかを検証するために、現代日本語における名詞述語文に加えて、それに類似する構造を持つ(疑似)分裂文( )の統語構造と意味機能を分析する。このような現代語と上代語の名詞述語文・(疑似)分裂文の特徴を踏まえた上で、“*-zo* ” という「係り結び」構造が名詞述語文ではなく、英語の *it-* と類似する分裂文構造であり、*-zo* というマーカー( )が の主要部( )に出現する発話力( )を示すものであることを指摘する。

現代日本語の名詞述語文の統語構造と意味機能体系を整理した上で、上代日本語における名詞述語文と *-zo* による「係り結び」構造がどのような統語構造と意味機能を有していたかを明確にすることが本稿の目的となる。

## 2. 現代日本語の名詞述語文

本節では現代日本語の名詞述語文 “*-wa -da/-dearu*”<sup>4</sup>) に関して、である と が小節構造を形成しているという立場に立ち、擬似分裂文を含めた統語構造と意味機能を考察する。

### 2.1. 名詞述語文の小節構造分析

(1997) は、英語やイタリア語における名詞述語文に (2) (3) のような「規範名詞述語文」( ) と (2) (3) のような「倒置名詞述語文」( ) があることを指摘している。

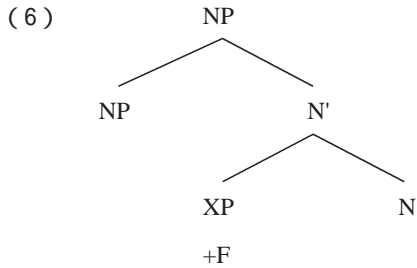
- (2) . ( 1997: 35 )
- (3) . ( 1997: 24 )

このような名詞述語文は、(4) のような小節構造から派生し、小節の主語 ( : ) が上昇したものが規範名詞述語文、述語 ( : ) が上昇したものが倒置名詞述語文となる。

- (4) a. IP VP be SC Subj a picture of the wall Pred the cause of the riot  
b. IP VP essere SC Subj le foto del muro Pred la causa della rivolta

日本語に関して、名詞述語文を小節構造として捉えているものに西垣内 (2016) があるが、西垣内 (2016) では、(5) のような指定文が (6) のような「中核名詞句」( ) と呼ばれる二つの項をとる名詞句から派生するとしている。

- (5) 東京が日本の首都だ (西垣内 2016: 137)



( 2016: 143 )

(6)の構造を小節構造として考えると、主要部である ( = ₁ )が主語となり、補部 ( = ₂ )が述語に相当することになる。この日本語の名詞述語文の構造は、(7)のような小節構造として記述できると思われる<sup>5)</sup>。



日本語の場合、英語やイタリア語などとは異なり、この小節構造の要素が分裂 ( )に生じ、 に現れる要素の違いにより名詞述語文の意味機能に差異が生じることになる。このことを考察するために、西山(2003)で指摘されている名詞述語文 “ -wa -da” と “ -ga -da” の統語構造と意味機能を <表1> に示してみる。

( 2003: 122 )

	"A-wa B-da"	"B-ga A-da"
1.	-wa -da	
2.	-wa -da	-ga -da
3.	[ ] -wa -da	[ ] -ga -da
4.	-wa -da	-ga -da
5.	[ ] -wa -da	
6.		-ga -desu

西山(2003)では、名詞述語文の と に出現する の指示性( )に着目し、名詞述語文を<表1>のように6つに分類した上で、「措定文」( )「指定文」(specifcational )「同定文」(identifcational )が主要な名詞述語文であることが指摘されている。

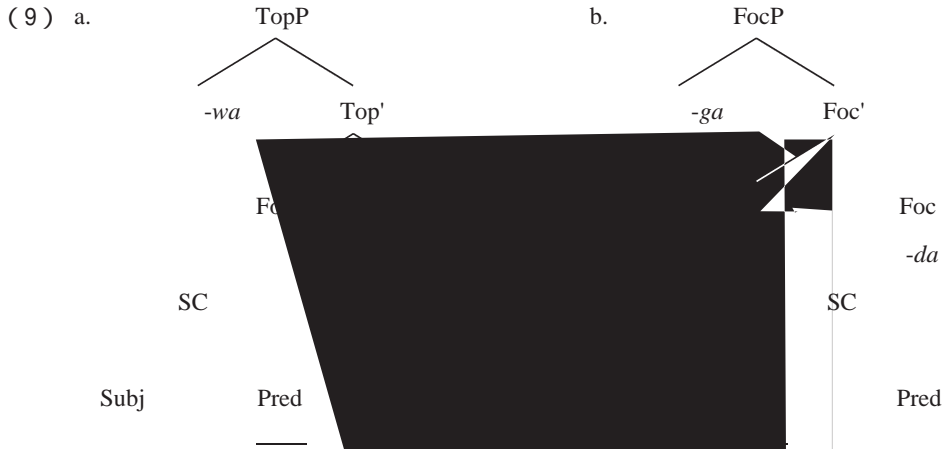
まず、「 で指示される指示対象について、 で表示する属性を帰す」(西山 2003: 122)とされる「措定文」は、 に指示的名詞句( )、 に叙述名詞句( )が出現し、その派生を本稿の考え方で示すと(8)ようになる。

(8)

「措定文」の派生においては、小節の主語である指示的名詞句「あいつ」が の指定部(specifer)に生じる<sup>7)</sup>。

「誰が(=どれが)..であるか」という疑問文とそれに対する答えを単一文のなかで実現している文」(西山 2003: 133)である「指定文」は、非指示的名詞句である「変項名詞句」を に置き、その変項を で指定する構造となる。一般的に、「倒置指定文」“-wa -da”は意味を変えずに

7) > 龍澤 利久、倒置指定文



(9) の「倒置指定文」では、小節の指定部が生起する。この小節の述語が繰り上がるものが英語の「倒置文」であるのに対して、(8)で示した小節の主語が繰り上がることに相当することになる。一方、(9)の「指定文」においては、主語が繰り上がることで、さらに焦点移動により 指定部に 格が付与され、野(1973)の *-ga* の「排他」用法になると考

「*は* いったい何者か」という問に対する (68)する「同定文」は、二つの指示的名詞句で構成され、その派生は

(10)

(10)は小節の主語である指示的名詞句の への生起、(10)は小節の述語からの への移動となっている。西山(2003)では、“-wa -da”と“-ga -da”という形式を基準としているので、(10)を「倒置同定文」、(10)を「同定文」と呼んでいるが、小節構造の並びで考えれば、(10)のタイプが「規範名詞述語文」、(10)のタイプが「倒置名詞述語文」となる。

以上の現代日本語の「指定文」、「指定文」、「同定文」の意味機能と、英語・イタリア語の名詞述語文の統語構造を対照させたものが<表2>である。

	<i>wa da</i>	<i>be essere</i>	
	<i>wa da</i>		
	<i>ga da</i>		
	<i>wa da</i>	<i>be essere</i>	
	<i>ga da</i>		

現代日本語は、“-wa -da”という統語構造に「指定文」と「倒置同定文」の読みが重なっているだけで、他は小節構造における主語と述語の並びと、-wa と -ga の使い分けによりそれぞれの読みが決定されていることになる。

## 2.2. (擬似) 分裂文

& (2002)には、現代日本語に(11)のような二種類の分裂文があるという指摘がなされている。

(11) . 太郎が食べた *no-wa* このリンゴ *-wo-da*

. 太郎が食べた *no-wa* このリンゴ *-da* ( & 2002: 36、一部改変 )

(11)の分裂文<sup>8)</sup>と(11)の擬似分裂文の違いは、表層的には焦点要素における格助詞 *-wo* の有無だけであり、& (2002)ではその統語構造は概略的に(12)のように示されている。

(12) a. Cleft [CP

このような僅かな表層的差異しかないこれらの二つの分裂文は、統語的にいくつかの異なる特性を示す。 & (2002, 2012)では、「多重分裂( )」、「島に対する感度( )」、「代用( )」、「同一節条件( )」、「主格・属格転換( ) - ( )」という点において、分裂文・擬似分裂文と *no-da* 文は <表 3 > のような統語的特徴を示すことが指摘されている。

さらに、 & (2002, 2012)は、分裂文の統語的特徴が *no-da* 文と類似していることに着目し、分裂文が(13)に示す *no-da* 元位置焦点構造から派生していることを主張している。

(13)

(13)の *no-da* 文から、(14)で示すように、まず分裂文の焦点位置にある要素が の指定部に焦点移動する<sup>9)</sup>。





一方、擬似分裂文に関して（2016）では、日本語の擬似分裂文の  $\text{XP}_1$  は (16) のような *wh-* ではなく、(16) のような *th-* に相当する構造であることが述べられている。

(16) a.  $\text{XP}_1$  What Herman bought was  $\text{XP}_2$  that tarantula .

b.  $\text{XP}_1$  The thing which Herman bought was  $\text{XP}_2$  that tarantula . Harada 2016: 59

*th-* における  $\text{XP}_1$  は主要部外在型関係節 (  $\text{XP}_1$  ) であり、日本語の場合、この外在する主要部は音韻的にゼロとなって現れる。（2016）で示されている擬似分裂文の  $\text{XP}_1$  の構造は (17) のようなものである。

(17)

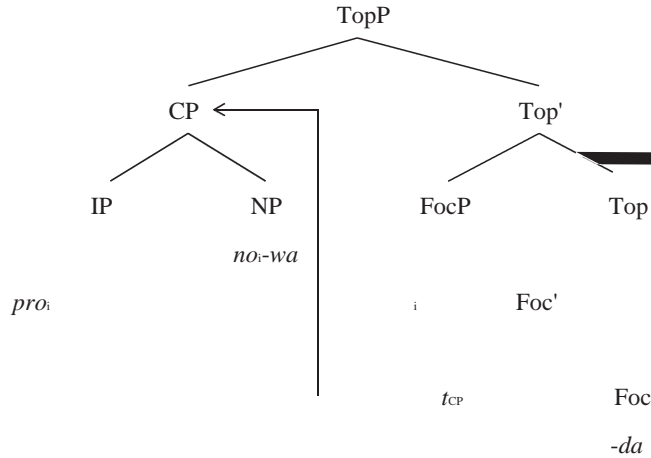
(17) は関係節  $\text{XP}_1$  が音韻的にゼロの外在主要部 ( $e$ ) を修飾していることを示している。そして、この主要部外在型関係節  $\text{XP}_1$  の主要部である  $e$  が  $\text{XP}_2$  の指定部に移動する。例えば、(18) の文をこの構造で示すと (19) のようになると思われる。

(18) 花子を殺した *no-wa*、あの男 *-da*。(西山 2003: 136)

(19)



(23)



(23)は、 内の要素が の指定部へ移動した後、関係節 全体が の指定部へ移動していることを示している。

次に(擬似)分裂文の意味機能構造についてであるが、(擬似)分裂文は第一義的に「倒置指定文」を形成すると考えられる。例えば、擬似分裂文である「花子を殺したの *-wa* あの男 *-da*」は、「誰が花子を殺したのか？」という問に対する答えを提供している。この答えとなる擬似分裂文は“ *-wa -da* ”という「倒置指定文」の構造であり、名詞述語文と同様、(24)のように「指定文」「 *-ga -da* ”との言い替えが可能となる<sup>11)</sup>。

(24) あの男 *-ga* 花子を殺した *no-da*

擬似分裂文は、このような「指定文」の読み以外に、(25)のように「措定文」として解釈される場合がある。

(25) あそこを歩いている *no-wa* 美人 *-da* (西山 2003: 124)

(25)は、「あそこを歩いているひと」が「美人」であると叙述して読む解釈となる。このような擬似分裂文における *no* は、「ひと」などに置き換えられる形式名詞であり、その関係節は主要部内在型である。そしてその統語構造は“ *-wa -da* ”という型である。

以上、(擬似)分裂文の統語構造と意味機能をまとめると<表4>のようになる。

no =	"Pred-wa Subj-da"	
no =		
no-da	"Subj-wa Pred-da"	
	"Subj-ga Pred-da"	

以上、本節では、現代日本語における名詞述語文と(擬似)分裂文の統語構造を考察し、意味機能を整理した。この考察を元に、次節では上代日本語の名詞述語文と *-zo* 「係り結び」構造の体系を分析していくことにする。

### 3. 上代日本語の名詞述語文

上代日本語の名詞述語文には、断定の助動詞 *-niari*、またはこの *-niari* から形成された *-nari* を用いた “ *-pa -n(i)ari* ” という型がある。また、断定の助動詞を用いずゼロコピュラ ( $\emptyset$ ) として出現する型である “ *-pa -\emptyset* ” とその疑問・感嘆形式 “ *-pa -\emptyset-ka(mo)* ” も名詞述語文の一つの型と見なすことが可能であると思われる。さらに、大野(1993: 195)には、上代日本語において「*「…ハ…ゾ*」という文型は日本語の「文」の最も基本的な型の一つ」とであるという指摘があるが、これは、*-zo* の文末用法を用いた “ *-pa -zo* ” という型が上代日本語における基本的な名詞述語文であるという指摘であると理解することが可能であろう。このような三種類の名詞述語文の形式は、(26)のように、「大和の国 *-pa*」で始まる文において出現する。

- (26) . 大和の国 *-pa* 言霊の助くる国 - (13/3254<sup>12)</sup>)  
 倭国者事霊之所佐国叙  
 . 大和の国 *-pa* 天皇の神の御代より敷きませる国 - しあれば (6/1047)  
 日本国者皇祖乃神之御代自敷座流国尔之有者  
 . 大和の国 *-pa* 皇神の厳しき国 - (5/894)  
 倭国者皇神能伊都久志吉国

(26)で示した名詞述語文は、いずれも「同定文」の意味機能を持ち、表層的にはコピュラの違いによる意味機能の差は感じられない。

それぞれの型が『萬葉集』においてどの程度出現するかを調査したものが<表5>であるが、頻度的にゼロコピュラである “ *-pa -\emptyset* ” の形式が、名詞述語文全体の半数を越えている。

13

"A- <i>pa</i> B- <i>n i ari</i> "	32 28.1%
"A- <i>pa</i> B- $\emptyset$ " <sup>14</sup>	62 54.4%
"A- <i>pa</i> B- <i>zo</i> "	20 17.5%
	114 100.0%

この “-*pa* - $\emptyset$ ” という形式のゼロコピュラが本当に - $\emptyset$  というコピュラであるのか、それとも何らかのコピュラの脱落であるのかは不明であるが、コピュラの脱落であるとするならば、-*zo* ではなく -*n(i)ari* であることは推定できる。それは、現代語の名詞述語文 “-*wa* -*da/-dearu*” のコピュラ -*dal/-dearu* に相当する -*n(i)ari* が脱落していると考えるほうが自然であるためである。そこで、本節では、まず、“-*pa* - $\emptyset$ ” と “-*pa* -*n(i)ari*” を上代語の名詞述語文として分析を進めていくことから始める。

### 3.1. “A- B- ”

上代日本語における基本的なコピュラの型と考えられる “-*pa* - $\emptyset$ ” は、以下に示すように、現代語と同じような意味機能で使用されている。

#### (27) 「措定文」 (“-*pa* - $\emptyset$ ”)

・我が目ら *-pa* ますみの鏡 - (16/3885)

吾目良波真墨乃鏡

・卯の花 *-pa* 今そ盛り - (17/3993)

宇能波奈波伊麻曾佐可理

#### (28) 「倒置同定文」 (“-*pa* - $\emptyset$ ”)

・葦原の瑞穂の国 *-pa* 神ながら言挙げせぬ国 - (13/3253)

葦原水穂国者神在随事挙不為国

・泊瀬の山 *-pa* 真木立つ荒き山道 - (1/45)

泊瀬山者真木立荒山道

#### (29) 「倒置指定文」 (“-*pa* - $\emptyset$ ”)

古に恋ふらむ鳥 *-pa* ほととぎす - (2/112)

古尔恋良武鳥者霍公鳥

これらが現代語と同じ小節構造から派生していると仮定すると、これらの派生は(30)~(32)のように記述できる。

- (30) a.  $\text{TopP} \quad \text{-pa} \quad \text{FocP} \quad \text{SC} \quad \text{Subj} \text{ ————— } ] [ \text{Pred} \quad \quad ] ] [ \text{Foc} \text{ -}\phi ] ] ]$   
 b.  $\text{TopP} \quad \text{-pa} \quad \text{FocP} \quad \text{SC} \quad \text{Subj} \text{ ————— } ] [ \text{Pred} \quad \quad ] ] [ \text{Foc} \text{ -}\phi ] ] ]$   
 a.  $\text{TopP} \quad \quad \quad \text{-pa} \quad \text{FocP} \quad \text{SC} \quad \text{Subj} \text{ ————— } ] [ \text{Pred} \quad \quad ] ] [ \text{Foc} \text{ -}\phi ] ] ]$   
 b.  $\text{TopP} \quad \text{-pa} \quad \text{FocP} \quad \text{SC} \quad \text{Subj} \text{ ————— } ] [ \text{Pred} \quad \quad ] ] [ \text{Foc} \text{ -}\phi ] ] ]$   
 $\text{TopP} \quad \quad \quad \text{-pa} \quad \text{FocP} \quad \text{SC} \quad \text{Subj} \quad \quad \quad ] [ \text{Pred} \text{ ————— } ] ] [ \text{Foc} \text{ -}\phi ] ] ]$

「措定文」(30)・「同定文」(31)が小節の主語、「指定文」(32)が小節の述語要素を に生じさせ、コピュラ  $-\phi$  が の主要部に出現することで “  $-\text{pa} \text{ -}\phi$  ” は派生すると考えられる。

このような “  $-\text{pa} \text{ -}\phi$  ” 型の名詞述語文の疑問・感嘆文の形式として “  $-\text{pa} \text{ -ka}(\text{mo})$  ” という型がある<sup>15)</sup>。

- (33) . 君を待つ松浦の浦の娘子ら  $-\text{pa}$  常世の国の海人娘子 - (5/865)  
 伎弥乎麻都麻都良乃于良能越等売良波等己与能久尔能阿麻越等売可忘  
 . 海神  $-\text{pa}$  奇しきもの - (3/388)  
 海若者霊寸物香

乗原(2010)には、現代語で - 疑問文の焦点は常に  $-\text{ka}$  の直前に来る要素であり、焦点化要素が へ移動することによって が活性化されるという指摘がある。この考えに従って(33)の派生を簡略的に示したものが(34)である。

- (34)  $\text{ForceP} \quad \text{TopP} \quad \text{-pa} \quad \text{FocP} \quad \text{SC} \quad \text{Subj} \text{ ————— } ] [ \text{Pred} \text{ ————— } ] ] [ \text{Foc} \quad \quad ] ] ] [ \text{Force} \text{ -ka} ] ] ]$

(34)は小節の述語「奇しきもの」が の主要部へ移動し、 によって 素性( )を付与された後に の  $-\text{ka}$  に付加していることを示している。このような  $-\text{ka}$  の付加による名詞述語文においては、いかなるコピュラも生起しないのは現代語と同様である。例えば、(35)のような文は、現代語における  $-\text{da}$  というコピュラが の主要部を占めており、焦点要素が移動する場所にすでに  $-\text{da}$  があるため成立しない。

- (35) . \* 幹事 *-wa* 田中 *-da-ka*  
 . ? 幹事 *-wa* 田中 *-dearu-ka*

このような 位置する *-ka* は、「疑問・感嘆」といった発話力を示すものであり、係助詞 *-zo* もこれと異なる発話力を示す機能を持つものであると考えられるが、このことについては後述することにする。

“ *-pa -ø* ” の型は、擬似分裂文としても出現する。

- (36) 「倒置指定文」( “ *-pa -ø* ” )  
 . 仕へ奉る *-pa* 卿大夫たち - (19/4276)  
 仕奉者卿大夫等  
 . 防人に行く *-pa* 誰が背 - (20/4425)  
 佐伎毛利尔由久波多我世

- (37) 「措定文」( “ *-pa -ø* ” )  
 . 大原の古りにし里に降らまく *-pa* 後 - (2/103)  
 古尔之郷尔落卷者後  
 . 逢へらく *-pa* 玉の緒 - (14/3358)  
 阿敞良久波多麻能乎

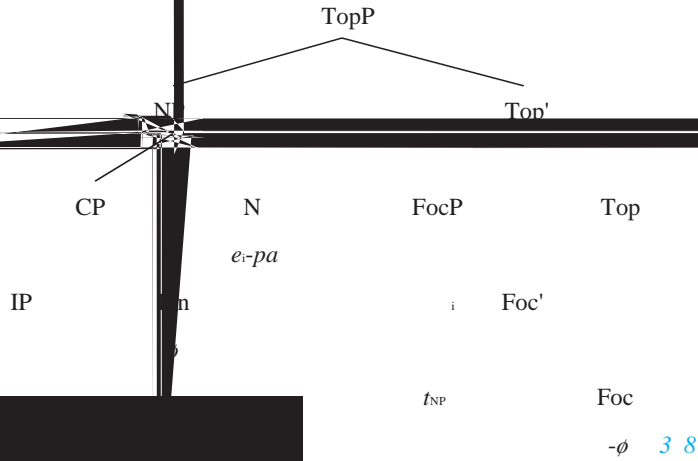
上代日本語における連体形 節 は、現代語と同様、主要部外在型関係節と考えられるが、現代語における *-no* という補文標識は上代語においてはゼロ(*-ø*)であるため、その構造は (38) のようになる。

- (38)  ${}_{NP} \text{ CP } \dots e \dots \emptyset e$  (  ${}_{NP} \text{ CP } \dots e \dots no e$  )

この関係節内にある要素が の指定部に移動し、この関係節 と音韻的ゼロの主要部 で構成される が の指定部に生じる。(36) の派生を示すと(39) のようになる。



(39) 9



を用いた “ -pa -*i*ari” 型の名詞述語文においても、

)  
ど (7/1268)

(17/3904)

)ari”  
犬したる君 -pa 母父が愛子 - も - む (13/3339)

者母父之愛子丹裳在将  
(35)

)ari”  
となびく雲 -pa 妹 - かも - む (7/1407)

本鴨在武

も飽き足らぬ日 -pa 今日 - し - けり (5/836)

藤倍等母阿岐太良奴比波家布尔志阿利家利



(47)は、関係節内にある要素「誰が恋」が の指定部に移動し、この関係節 と音韻的ゼロの主要部 で構成される が の指定部に移動していることを示している。

これ以外に、“-pa -niari” には(48)のような主要部内在型関係節も見られる。

(48) 「指定文」 (“-pa -niari”)

・ 古の七の賢しき人たちも欲りせし *mono-pa* 酒 - し - らし (3/340)

古之七賢人等毛欲為物者酒西有良師

・ 意吉麻呂が家なる *mono-pa* 芋の葉 - し (16/3826)

意吉麻呂之家在物者宇毛乃葉尔有之

このような主要部内在型関係節が現代語と同じ構造であると仮定すると、(49)で示すような主要部 *mono* が関係節内に留まる構造となる。

(49)  ${}_{CP} \quad {}_{IP} \dots pro_i \dots \quad mono_i \quad -pa \quad NP_i - niari \quad [{}_{CP} \quad {}_{IP} \dots pro_i \dots \quad no_i \quad -wa \quad NP_i - da$

このような の構造から(48)の派生を示したものが(50)である。

(50)

(50)は、 内の要素が の指定部へ移動した後、関係節 全体が の指定部へ移動していることを示している。

以上、本節では上代日本語における擬似分裂文を含めた名詞述語文 “-pa - $\emptyset$ -(i)ari” の統語構造と意味機能の考察を行った。上代語の名詞述語文は、現代語の名詞述語文 “-wa -da” と同様の意味機能を有しており、補文標識 -no の未発達やコピュラ - $\emptyset$  の使用などの形式の相違は

あるものの、上代語は現代語と同様の統語構造を保持しているということが言える。

#### 4. 分裂文としての「係り結び」構造

本節では、*-zo* による「係り結び」構造である “*-zo* (*-pa*)” が単純な名詞述語文ではなく、英語の *it-* に相当する分裂文であることを考察していく。

##### 4.1. 「係り結び」の統語構造

大野(1993: 195)には、「係り結び」構造である “*-zo* (*-pa*)” は、“*-pa -zo*” が倒置したものであるという指摘がある。しかしながら、このような倒置説は、柳田(2016)も指摘しているように、(51)の原型が(51)の倒置構造に変化し、さらに(51)のように元に戻るという史的統語論では余り見られない現象のものとなる。

- (51) . 昨夜夢に見えつる(・)我が恋ふる君 -  
 . 我が恋ふる君 - 昨夜夢に見えつる (2/150)  
 吾恋君曾伎賊乃夜夢所見鶴  
 . 昨夜夢に見えつる - 我が恋ふる君 - (柳田 2016: 136-137、一部改変)

さらに柳田(1985)では、大野(1993)の倒置説を否定した上で(52)のような指摘を行っている。

- (52) 「筆者は、意識としては倒置のような意識があるわけであるが、或る文を倒置させて生まれたというのではなく、先ず、強調の対象となる句を「ゾ」でしめくくった一文として相手に投げ出し、その後、叙述を展開させたのが係り結びではないか、と考える。」(柳田 1985: 158)

この指摘は、「係り結び」構造というものが焦点化する要素を命題の前に置き、マーカーとして *-zo* を前接するものである、というように受け取れる。これは、焦点要素を提示する特別なコピュラとして *-zo* を捉えるものであり、英語の *it-* と類似した構造であると言える。このような考え方は、渡辺(2005)における上代日本語には 移動が存在しているという指摘にも合致するものとなる。渡辺(2005)は、上代日本語における係助詞 *-ka/ -ya* に結合する 句が のに移動すると述べている。

- (53) 春日野の藤は散りにて何 *-wo-* み狩の人の折りてかざさむ (10/1974)  
 春日野之藤者散去而何物鴨御狩人之折而将挿頭

(53)の「何 *-wo-kamo*」のような 句は、「み狩の人の」という主語より前の位置に必ず現れる。この派生を簡略的に示すと(54)のようになると思われる。

(54) CP FocP [ Foc' *-kamo* IP *-no* — ]]

このような 移動が *-zo* の焦点移動と同じものであると仮定すると、焦点が に移動する「係り結び」構造(51)は(55)のように派生することになる。

(55) CP FocP [ Foc' *-zo* IP — ]]

このようなことから、“ *-zo* (*-pa*) ”という型は、“ *-pa* *-zo* ”という名詞述語文が倒置した構造ではなく、命題文内における焦点要素を に 移動し、特別なコピュラ *-zo* を付与する分裂文構造であると言える。分裂文に関して、 & (1995)では、(56)のような構造上の特性があることが指摘されている。

(56) “ ( ) ( 1 ) ( 2 ) ( )  
 ,( ) ”  
 ( & 1995: 153 )

これを上代日本語における *-zo* による「係り結び」構造と照合してみると、( )上位節( 1 )と下位節( 2 )から構成され、( )上位節に *-zo* という特別なコピュラを含み、( )下位節は連体形終止する関係節構造を持つ、というようになる。この構造を示したものが(57)となる。

(57)

*zo*

∅

このような には、(58)に示すように 2の主語、目的語、副詞句など多様な要素が出現する。

## (58) . 主語

大君之行幸のまにま我妹子が手枕まかず月 - 経にける (6/1032)

天皇之行幸之隨吾妹子之手枕不卷月曾歷去家留

. 目的語(-*o* 格)

阿胡根の浦の珠 - 拾はぬ (1/12)

阿胡根能浦乃珠曾不拾

. 目的語(-*wo* 格)

紫の糸 -*wo*- 我が搓る (7/1340)

紫糸乎曾吾搓

. 後置詞句(-*ni* 格)

遠くあれど君 -*ni*- 恋ふる (11/2598)

遠有跡公衣恋流

. 副詞句

初もみち葉を手折り持ち今日 - 我が来し見ぬ人のため (10/2216)

始黄葉乎手折以今日曾吾来不見人之為

. 副詞節(接続助詞 -*te*)

夕さればひぐらし来鳴く生駒山越え -*te*- 我が来る (15/3589)

由布佐礼婆比具良之伎奈久伊故麻山古延弓曾安我久流

. 副詞節(接続助詞 -*tsutsu*)

飛羽山松の待ち -*tsutsu*- 我が恋ひ (4/588)

---

## (59) . 主語

月夜良み門に出で立ち妹 - 待つらむ (4/765)

月夜好見門尔出立妹可将待

. 目的語(-*o* 格)

海人小舟帆 - 張れると (7/1182)

海人小船帆霧張流登

. 目的語(-*wo* 格)

何 -*wo*- み狩の人の折りてかざさむ (10/1974)

何物鴨御狩人之折而将挿頭

. 後置詞句(-*ni* 格)

いたづらに地 -*ni*- 落ちむ見る人なしに (10/1863)

徒土哉将墮見人名四二

. 副詞句

今日 - 来む明日 - 来むと家人は待ち恋ふらむに (15/3688)

今日可許牟明日可蒙許武登伊散妣等波麻知故布良牟尔

. 副詞節(接続助詞 -*te*)

いづし向き -*te*- 妹が嘆かむ(14/3474)

伊豆思牟伎弓可伊毛我奈気可牟

. 副詞節(接続助詞 -*tsutsu*)

奥かなく知らぬ山道を恋ひ -*tsutsu*- 来む (12/3150)

奥香無不知山道乎恋乍可将来

. 小節の述語

いや増しに我が思ふ君がみ舟 - かれ (18/4045)

伊也麻之尔安我毛布支見我弥不根可母加礼

このことから、-*ka* による「係り結び」構造というのは、-*zo* による「係り結び」構造と同じ分裂文であると考えられることができると思われる。

以上のように、文中で使用される -*zo*/-*ka* が分裂文に使用されるマーカーであると仮定すると、-*zo* が文末に現れる(60)のような “-*pa* -*zo*” は現代語の *no-da* 文に相当する構造である可能性が考えられる。

(60) . 豊泊瀬道 -*pa* 常滑の恐き道 - (11/2511)

豊泊瀬道者常滑乃恐道曾

赤駒が足掻き速けば雲居にも隠り行かむ - (11/2510)

赤駒之足我枳速者雲居尔毛隠住序

現代語の *no-da* 文の統語構造は、2.2. 節で考察したように、補文標識 *no* と の主要部にコピュラ *-da* が位置する(61)のような構造である。

(61)      FocP    FinP    IP      Fin *no*      Foc *-da*

(61)で示したように、*no-da* 文においてコピュラ *-da* は の主要部に位置する。上代語においては、 の主要部に位置するコピュラとしては *-ri(i)ari* があるが *-ø* が基本であることはこれまで指摘した通りである。*-zo* がコピュラでないとすると、*-zo* は より高い位置にある に出現する要素となり、それは(62)のような統語構造として示すことができる。

(62)      ForceP    FocP    FinP    IP      Fin  $\emptyset$       Foc  $-\emptyset$       Force *-zo*

この様な考えに基づくと、*-zo* は に位置する「強い断定・強調」という発話力を示すマーカールということになる。*-zo* が のコピュラでなく に位置するマーカールであることは、*-ka* の前にコピュラ *-ri(i)ari* が現れる(63)のような例からも理解できると思われる。

(63) 逢はむと言ふ *-pa* 誰 - - (12/2916)

相登云者誰有香

(63)では、*-ka* は の主要部にあるコピュラ *-naru* より外側に位置している。*-zo* と *-ka* が同じ位置に出現する要素であるとする、(63)のような例から *-ka* は の外側である に出現する要素ということになる。

(64)      ForceP    FocP    FinP    IP      Fin  $\emptyset$       Foc *-nari*      Force *-ka*

現代語では上代語のような *-zo* の使用は消失しているが、*-ka* は現代語でも上代語と同じ構造を保持していると思われる。例えば、「あなたは昨日大阪へ行った *no-desu-ka*」という文においては、*no* という補文標識、*-desu* というコピュラ、*-ka* という終助詞で(65)のような統語構造を形成している。



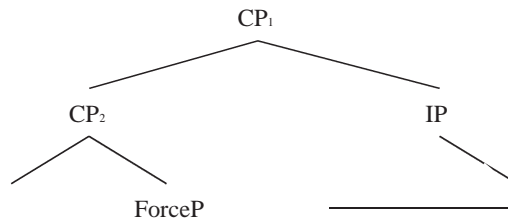
(65) ForceP FocP FinP IP

][<sub>Fin</sub> no]][<sub>Foc</sub> -desu]][<sub>Force</sub> -ka]]

(65)の文に対して、 $\text{CP}_1$ に位置するコピュラが脱落している「あなたは昨日大阪へ行った *no- $\theta$ -ka*」という文も文法的であることは、*-ka*が  $\text{IP}$ に位置する要素であることに対する証左となると思われる。

本節では、“*-zo (-pa)*”という係り結び構造が英語の *it-* と類似した分裂文であり、*-zo*が文末に出現する“(*-pa*) *-zo*”という型が現代語の *no-da* 文に相当するということを考察した。本節の最後に、(58)の分裂文と(60)の *no-da* 文の派生を示しておく。

(66) 分裂文



FocP	Force
	<i>-zo</i>
Foc'	
nP	Focus
Fin	
	$-\emptyset$





る「スコープの「の(だ)」<sup>17)</sup>と、*no-da* の形式で完全に一語化し、事態をどう捉えるか、聞き手にどう伝えるかという話し手の心的態度を表す「ムードの「のだ」<sup>18)</sup>という二種類の機能を区別している。上代語における の文においても、これと同様の二種類の機能が確認される。

(71) . 我が衣摺れるにはあらず高松の野辺行きしかば萩の摺れる - (10/2101)

吾衣摺有者不在高松之野辺行之者芽子之摺類曾

. 夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は我待つらむ - (18/4072)

欲和多流都奇乎伊久欲布等余美都追伊毛波和礼麻都良牟曾

(71) は、ただ「摺れる」のではなく、「萩」が触れて「摺れる」ということを「指定」している構造になっており、野田(1997)における「スコープの「の(だ)」」に相当するものである。一方、(71) は、「妻はどうしているだろうか」ということを「我待つらむ」と「解説」するような読みであり、野田(1997)における「ムードの「のだ」」に相当する。

本節では、(1998)の分裂文の情報構造による分類に基づき、*-zo* の「係り結び」構造の意味機能を考察した。この考察の結果をまとめたものが<表7>となる。

Type	
Type A	"Pred- <i>zo</i> Subj"
Type B	"Subj- <i>zo</i> Pred <sub>abdominal</sub> "
Type C	"Pred <sub>abdominal</sub> - <i>zo</i> "

## 5. 結語

本稿では、現代日本語と上代日本語における名詞述語文を小節構造として分析し、その統語構造と意味機能の考察を行った。日本語における名詞述語文の小節構造は(72)のように一般化して示すことができる。

(72)

この小節構造における構成素が の談話情報構造に生じることにより、以下のような意味機能が出現することになる。

(73) a.

[<sub>TopP</sub> NP<sub>1</sub>-*wa* [<sub>FocP</sub> [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [<sub>Foc</sub> -*da*[<sub>TopP</sub> NP<sub>1</sub>-*pa* [<sub>FocP</sub> [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [<sub>Foc</sub> -*ø/-n i ari*

b.

[<sub>TopP</sub> NP<sub>1</sub>-*wa* [<sub>FocP</sub> [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [-*da*[<sub>FocP</sub> NP<sub>2</sub>-*ga* [<sub>IP</sub> ~~NP-ga~~] [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [-*da*[<sub>TopP</sub> NP<sub>1</sub>-*pa* [<sub>FocP</sub> [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [<sub>Foc</sub> -*ø/-n i ari*

c.

[<sub>TopP</sub> NP<sub>2</sub>-*wa* [<sub>FocP</sub> [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [-*da*[<sub>FocP</sub> NP<sub>1</sub>-*ga* [<sub>IP</sub> ~~XP-ga~~] [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>] [<sub>Pred</sub> NP<sub>2</sub>]]] [-*da*[<sub>TopP</sub> NP<sub>2</sub>-*pa* [<sub>FocP</sub> [<sub>SC</sub> [<sub>Subj</sub> NP<sub>1</sub>]]] \_\_\_\_\_

現代語においては、“ -*wa* -*da*” が「指定文」と「同定文」の読みになり、“ -*wa* -*da*” が「指定文」の解釈を受ける。上代語においても、現代語と同様、“ -*pa* -*ø/-n(i)ari*” が「指定文」・「同定文」、 “ -*pa* -*ø/-n(i)ari*” が「指定文」の読みとなる。さらに現代語においては、-*ga* 格を用いた “ -*ga* -*da*” が「同定文」となり、“ -*ga* -*da*” が「指定文」となるが、上代語では -*ga* 格が未発達であるためこのような統語構造は見られない。

この現代語の -*ga* 格を有する構造に近い意味機能を示すと感じられるのが「-*zo* 係り結び」構造であるが、本稿では「-*zo* 係り結び」構造を分裂文として分析した。(75)で示す -*zo* の文中用法である分裂文は、(74)の -*zo* の文末用法である *no-da* 文から派生すると考えられる。

(74)

(75)

この -*zo* 「係り結び」構造の意味機能は以下のようになる。

(76) a.

Type B: [CP<sub>1</sub> [CP<sub>2</sub> [ForceP [FocP NP<sub>1</sub> [FinP [IP ] [Fin  $\emptyset$ ]] [Foc - $\emptyset$ ]] [ForceP -ZO]]] [IP [SC [Subj NP<sub>1</sub>] [Pred NP<sub>2</sub>

Type C: [CP [ForceP [FocP XP<sub>{abdominal}</sub> [FinP [IP ] [Fin  $\emptyset$ ]] [Foc - $\emptyset$ ]] [Force -ZO

b.

Type B: CP<sub>1</sub> CP<sub>2</sub> ForceP FocP NP<sub>1</sub> FinP IP Fin  $\emptyset$  Foc - $\emptyset$  ForceP -ZO IP SC Subj NP<sub>1</sub> Pred NP<sub>2</sub>

c.

Type A: CP<sub>1</sub> CP<sub>2</sub> ForceP FocP NP<sub>2</sub> FinP IP Fin  $\emptyset$  Foc - $\emptyset$  ForceP -ZO IP SC Subj NP<sub>1</sub> Pred NP<sub>2</sub>

Type C: CP ForceP FocP XP<sub>abdominal</sub> FinP IP Fin  $\emptyset$  Foc - $\emptyset$

以上、上代日本語における名詞述語文と「-zo 係り結び」構造の統語構造と意味構造を現代語と比較・対照して明確にした。今後は、「-zo 係り結び」構造の消失と -ga 格の発達との関連について通時的に明らかにしていくことが課題となると考えている。

## 註

- 1) 三上(1972)では、文を動詞文と名詞文に大別し、名詞文をさらに形容詞文と準詞文に分類している。本稿で扱う名詞述語文は、この三上(1972)の名詞文における準詞文に相当する。
- 2) -nari は古代語で -niari が融合して形成されたとされる。
- 3) 現代語のコピュラとして使用されているものに下線を付している。
- 4) 煩雑さを避けるために、これ以降、現代語の名詞述語文を “-wa -da” として表記する。
- 5) 構造記述の煩雑さを避けるため 指定部の（「日本(の)」)を省略してある。
- 6) 叙述名詞句は、非指示的名詞句の一種であり、「属性・性質・状態」を示す。
- 7) -wa 句がどのように派生するかは議論のある所であるが、本稿では の指定部に生起するという考え方に依拠している。
- 8) 分裂文における焦点要素と共起する格助詞に関して、-ga 格の容認性が低いとされる。  
花子を叩いたのは太郎 \*-ga )da。  
太郎が叩いたのは花子 -wo-da。  
太郎が会ったのは花子 -ni-da。 (三原・平岩 2006: 251、一部改変)
- 9) & (2002: 43)では、 の主要部にあるコピュラ -da は文法化した焦点マーカーであるとしている。
- 10) 主要部内在型関係節が名詞節であるのか副詞節であるのかという議論があるが、本稿では名詞節という立場で論を進めていく。

- 11) 西山(2003: 138)では「倒置指定文が分裂文「(の)は だ」の場合は、対応する指定名詞述語文「が だ」は存在しない」との指摘があるが、焦点化される要素が元の文の主語である場合は *no-da* 文として指定名詞述語文が可能である。
- 12) 13/3254は、『萬葉集』巻第十三、3254番を示す。
-

- 142-180.
- （1997）*The Raising of Predicates*, .
- （1991）“ ”, & . *Grande grammatica italiana di consultazione Volume II: I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, .
- （1998）“*Kakari Musubi* : ” *Japanese/Korean Linguistics* 8, 203-216.
- （1994）“ ”, *The Bulletin of Osaka Women's Junior College* 19, 75-85.
- 青木博史(2015)「終止形・連体形の合流について」, 秋本実治・青木博史・前田満編『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房, 271-298.
- 上野貴史(1994)「英語における の談話情報構造: - 構造と - 」『ニダバ』第23号, 104-112.
- (2017)「日本語における「ハ」句と「ガ」格の統語機能について: イタリア語との対照」, 『広島大学大学院文学研究科論集』第77巻, 31-50.
- (2018)「上代日本語における統語構造の一考察」, 『広島大学大学院文学研究科論集』第78巻, 75-106.
- 遠藤喜雄(2010)「終助詞のカートグラフィー」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究: 命題を越えて』開拓社, 67-94.
- 大野晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店.
- 神田靖子(2005)「コピュラ構文の文法化: 歴史的語用論の視点から見た「ノダ」の原型仮説 平安初期まで」, 『同志社大学留学生別科紀要』第5号, 17-32.
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店.
- 黒田成幸(1999)「主部内在関係節」, 黒田成幸・中村捷編『言語の核と周辺』くろしお出版, 27-103.
- 栗原和生(2010)「日本語疑問文における補文標識の選択と 領域の構造」, 長谷川信子編『統語論の新展開と日本語研究: 命題を越えて』開拓社, 95-127.
- 小路一光(1988)『萬葉集助詞の研究』笠間書房.
- 西垣内泰介(2016)「J「指定文」および関連する構文の構造と派生」, 『言語研究』150, 137-171.
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 松村暎(1969)『古典語 現代語 助詞助動詞詳説』學燈社.
- 三上章(1972)『現代語法序説: シンタクスの試み』くろしお出版.



- 三原健一(1994)『日本語の統語構造：生成文法理論とその応用』松柏社．
- 三原健一・平岩健(2006)『新日本語の統語構造：ミニマリストプログラムとその応用』松柏社．
- 柳田征司(1985)『室町時代の国語』東京堂出版．
- (2016)『日本語の歴史6：主格助詞「ガ」の千年紀』武蔵野書院．
- 山口堯二(2002)『「である」の形成』、『京都語文』第9号, 74-87．
- 渡辺明(2005)『ミニマリストプログラム序説：生成文法のあらたな挑戦』大修館書店．

# The Small Clause Analysis of Copular Sentences in Old Japanese:

**Key words:** Copular Sentences, Cleft Sentences, “ ” Sentences, Copula, Small Clause

This paper aims to define the form and function of Old Japanese copular sentences containing the NP-*da*

<i>n(i)ari</i>	<i>ø</i>
<i>pa ø/-n(i)ari</i>	

<i>kakari musubi</i>	<i>kakari</i>	<i>zo</i>
<i>kakari musubi</i>		

<i>kakari musubi</i>	<i>zo</i>
<i>it</i>	<i>zo</i>

